

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	これからの国語教育と国語科総合単元学習 (2001年)
Author(s)	浜本, 純逸
Citation	国語教育思想研究 , 27 : 1 - 8
Issue Date	2022-12-01
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00053338
Right	
Relation	



はじめに

神戸大学の教員としては今年で最後になるということでの講演依頼かと思しますので、神戸大学附属住吉小学校中学校との共同研究の一つの中仕切として、私事もからめながら報告したいと思えます。

一 これからの国語教育と国語科

これからの国語教育については、大きく三つの方向が考えられます。

① 教育として—学習者中心=学び手を育てる。

学習者を中心にして、子どもの伸びようとする方向に学ぶ力をつけていくというところにこれからの教育・国語教育があると思えます。

② 内容として—言語活動を育てることを通しながら、子どもの言語文化を高めていく。

言語活動にこだわることはよいことですが、昨今の実践は横に広がるだけで深まらないという傾向が見えてきています。それに対して、言語活動の質を高めていくのは、子どもの内側にある言語文化を高めていくことではないか。外側にある言語文化(古典など)とぶつからせることで、子どもの心を育てていくことがこれからの内容だと考えます。

③ 方法として—言語活動の場を設定する。

本を選ぶ力を育てるために、読書案内や文献リストを子どもの前に用意し、どの本を読みたいかを選んでいくというような問題解決的な活動をいっそう進めていくべきです。

問題解決的な活動とは、国語科の場合では、

- ①問題発見(自分で問題を発見する)
- ②探求活動(調べるなどの学習活動)
- ③表現(「読書に開く」という終わり方も)

の三段階となるのが望ましい。この三つの過程を国語科にも取り入れていくことがこれからの課題になります。

二 附属住吉小学校・中学校総合単元学習の歩み

この総合単元学習研究会は一九八四年の十一月に開かれています。その時に、「言葉と心を育てる総合単元学習」という冊子を作っています。その第一回に書いたのが、「単元学習小論 1」(『総合単元学習』附属住吉中学校国語科一九八五・一一・二八)です。そこには、「言葉を使いこなす言語生活者を育てることが私たちの目標である」と書いてあります。すでにこの時期から、言語文化にふれて心を高めていく人間を育てたい。」ということも考えています。文学作品を丁寧に読んでいくという過程を入れていきたい、とも考えています。

その時考えていたのは、「できるだけ学習を生活の実際に近づけていくことをしていきたい。」ということであり、学習が生活から離れた座学になっていて、暗記だけでは本当の学習ではないのではないか、という心配を持って、「生活に近づけていく」ということを強調しています。

言語生活の聞く・話す・読む・書くの四領域の活動能力と領域を系統的に構造化して、領域別に教えた方が指導効果も高いと考えられる、とこのときはしています。このあたりはやや幼稚です。学力については、テストには役立っても卒業するとなくなるような、芦田恵之助のいう「剥落する学力」をつけるだけではない。どうやったら身につくかを考え始めています。

神戸大学の学生も入学の時は英単語を五千語くらい覚えていても、五月ころには全部忘れた、と言います。試験が終わったら忘れる、という学力は本当の学力とはいえない。身につく学力は経験を通して身につけるものではないか、というのが考えていたことです。総合というのにはそういう意味合いをこめていたわけです。

経験主義の単元学習は、指導要領は一九四七年十二月に発表され、伝達講習会が行われて広がる

のは一九四八年六月。それから翌々年の五十年八月にかけてのわずか二年半くらいで消えていきました。一九五〇年前後の単元学習は経験づくりに追われて、系統化できなかつた、と考えられます。これは時間が少なかったということとともに、「学力がつかない」として根づく前に消されていったのでしょう。

これに対して私達は、このことを反省して新しい単元学習を作ろうということで、総合単元学習という言い方をしました。年間の学習計画においては、教材単元や練習単元を位置づけていこうとしていることにも意気込みが見えてきていると思います。

また、ここで自己学習力という概念が、視野に入れられていたということも、歴史的に見ると重要です。

三年目の一九八六年には、問題点として「一斉授業がどうやら行き詰まっている」(「単元学習小論 2」)ということが実感として気づかれてきました。四十人に同じものを同じように教えることが無理なのではないか、という疑問は今も続いています。

大村はま先生はこれについて、個別指導をするためにグループ学習が必要だとしています。グループ学習は一人一人を育てる方法として考えられています。どのようなグループ学習を作っていけばよいか、考えていきたい。

このときに総合単元学習という言葉を使っているのは、二つの意味の「総合」があるからです。活動領域の総合・読む・書く・話すの言語活動のある単元の中で全部行っていく。

ジャンルの総合...小説、説明文、作文活動などのジャンルを総合していく

これからの総合単元学習を考えるときに、今年あたりは、活動中心の総合単元学習が薄っぺらになってきているということが見えてきています。そういう点では厚みのある内省的な機会を取り入れるという意味で、小学校高学年から中学校高等学校において、単元の中に、できるだけ文学作品を取り入れていきたい。二十時間の単元の中で、四時間から五時間は俳句をつくるとか「走れメロス」を読むとか内側に向かっていく機会を作ることのできる文学作品を活動にとり入れるといいんじゃないかと思います。体験学習は、とかく言葉

が外へ外へと広がっていきます。言葉に厚みがない子どもが育ちかかっています。うすい言葉は共通のものをくくるには都合がよいが、心がこもらない、そういう傾向が見えてきていることを懸念しています。

この時代に興味あることは、第二回目から「これからの社会では「見る力」を育てることが求められているが、「見ること」と「ことば」と「思考」の関係はどのように構造化して単元を構成したらいいのであろうか」と、すでに「見る力」を国語科の領域に取り込んでいることです。倉沢先生の言葉によれば、「seeing」で、アメリカの国語教育の中に今かなり位置づけられております。テレビやパソコンの映像やビデオアニメなどで見たことを説明したり批評したりすることが求められる。コマーシャルなどに流されないで、批判的に見るという点でクリティカルシンキングと言われています。見るのが、国語科の学習指導になっていくだろうから研究したい、ということ十五年前に言っています。

単元の活動をしていくと、「育てたい能力一覧表」といったものが必要になります。一年目にこれを苦勞しながら、作っていきました。十五年間使って、一応の役割を果たしてきましたが、これからもより改善していくことが私達の課題だと思います。こういうものを通して、カリキュラム=この学力の一覧表を含んだ題材、テーマ、単元というものを一学期毎に組んでいって、例えば六学年三学期十八単元をつくっていくということはこれからの課題になります。

このような考えの根拠となったのは、「ひとりひとりを育てる教育」(『子どもと教育』三号)に書いたことに出発している感じがします。私の考法では、直観でまずいって、繰り返し繰り返し深めていきます。これも一六年間、同じ事を繰り返し言っていたことです。その点で広がり狭さがあるかも知れませんが、どのように深まったかというところが見られるかなとも思います。

十五年前(一九八九)、「今、教育は改めなければならぬと思う。子どもを取りまく社会環境が変化した。そのために教育に様々な矛盾が現れてきた」(「ひとりひとりを育てる教育」と述べています。特に「塾通い」がその事実として当時はある。この「塾通い」をどのように評価するかですが、

保護者の方が、公立学校に不信を示していることがあります。塾通いの経済的余裕が生まれる中で、学習内容も保護者が選び始めた。それが一九七〇年代でした。

近代学校で多くの子どもに早く一定水準の「読み書きそろばん」の能力をつけるには、近代工場生産方式で先生が子どもに詰め込みながら、早く進級させていくという方法が効果的であったかと思えます。そのときの方法が、画一的な教科書をとおして、黒板を使って一斉授業をすることでした。

しかし、一九七〇年代から高校全入などの成果で、日本の学校は変質しなければならなかったと思えますが、それを私たちは二五年間怠ってきたのではないか。それが不登校、塾通い、学級崩壊に現れてきています。

国民は学校を選びはじめ、学校選択制に切り替えていかなければならないような中で、みんなに同じものを一斉に教えていこうという概念では教育は進められなくなったのではないかという実感があります。

このように社会の変化、親の教育意識の変化をとらえる時、私は「共通の教育内容を一斉授業で」という近代公立学校の理念やその延長上にある戦後の平等理念の具体化である「みんないっしょに同じものを」という教育思想は検討を迫られている」「ひとりひとりを育てる教育」と十五年前に言っていますが、一斉授業を超えていく所に単元学習への道があります。

そのあたりから金子みすずの詩にあるような「みんなちがってみんないい」という、違うことが普通なのだという考え方が受け入れられる状況が生まれてきた。それなのに学校は「みんなちがってみんないい」というような学習内容を組んでいない。先に行く子には「ちょっと待ちなさい」。遅れている子には先生としてはつらい思いをしながら見て見ぬ振りをして先に進まざるをえない、という状況が今でもないわけではありません。

我々はこれを「形式的な平等主義 (formal equality)」と呼んでいます。これに対して、遅れている子は一歩高める、七分かっている子には八を、十一十二の子には十三を求めるというように、一人ひとりの能力や資質に応じた学習課題を設定しながら、伸ばしていくことが必要だろうと思

ます。

このころ、大村はま氏が「日本の学校はよくできる子を伸ばしていない」と言っています。算数だけはできる子、中学生で漱石まで読んでいる子、虫博士などという子により高い課題を与えないで、待たせておく。待たされる子が欲求不満で授業を邪魔するという状況もありました。

よくできない子ついていけない子に「あ」を書く力をつける。これは教師のつとめです。しかし、できる子にその上の要求をすることも同じく教師のつとめなのです。一人ひとりに応じた違った内容のメニューを用意しながら、緊張感のある学習の場をつくっていくことが、「新しい平等観=質的平等観 (qualitative equality)」だと思えます。この平等観の概念を切り替えることができなかつたところに二十五年後の学級崩壊などの原因があつたと考えます。

日本の教育を締め付けてきたのは、大学入試だったともいえますが、大学全入の時代になった時にはその締め付けも緩くなり、「勉強しないとテストに通らないよ」という脅しが利かなくなります。そのときに、本当の学力が期待されます。

十五年前に質的な平等を実現する方法として総合単元学習を模索していたともいえます。そのために三つの提言をしています。

- ①教育課程・教材編成の規制を緩やかにする。教師の主体性を信頼し、教育課程の規制を緩やかにする。住吉では、学年の単位を二年とすることで縛りをなくす。異学年の共同学習もしていいのではないかと思います。
- ②子ども一人ひとりを育てる教育が望まれる。
- ③ 授業の改革を試みる。

学習者の意欲を引き出すために興味のある単元を設定する。本選び、スピーチの場を設ける、詩をつくる。しかも育てたい学力は保障する。

今日の若生(附属住吉小)教諭の授業でも、子どもは谷川さんの詩を読むよりも、谷川さんのような詩を作りたい、と要求してきたと聞きました。子どもの要求に応じて、より高い要求だったら、切り替えていい。指導要領や、教科書会社の指導書に書かれたとおりにするのは子どもを忘れた授業作りです。何を教えるか、ということは教材の違いではなく、どのような力をつけるか、だと思えます。子どもとぶつかってあれこれと教材や学習

課題を変更していくのは、むしろ望ましい。特色のある学校を作っていくことになります。

学習指導計画をデザインするとは、変更可能なプログラムを一層柔軟に作っていくということなのです。デザインという用語を使って変更可能なプログラムを作っていくしたいと思います。基本的には学校は一人ひとりを育てていくところであり、四十人をまとめて指導することは不可能だという認識から総合単元学習は始まっている気がします。

「国語科の新単元学習の構想と授業計画」という明石と住吉の先生方とここにいる井上先生などと一緒に、小中学校の九年間の「実践の積み重ねによってカリキュラムを作る」という考え方ができました。こういうものを土台にしながら、最初のものが修正されていきます。

「学び方を学ぶ」「自然との共生を考える」「自然と人間」「人間と言葉」「言葉と言葉」「情報と言葉」「国際化と言葉」という形で単元名が作られていますが、言葉を考えることを楽しくしていくための工夫として、単元名を見ていくとよいかと思います。自然との共生を考える「動物と語ろう」。子どもの言葉を考えるでは「僕は私はどんな赤ちゃんだったかな」という形で「自分探検」の単元を作っている。

言葉を考えるでは「暖かい言葉とは」という形で語彙指導。情報と映像のところでは、「私の絵本を作ろう」で町探訪で情報マップを作っています。情報と映像に早くから目をつけていたのも附属住吉小の特徴です。これからは、どういう形で国語の中に映像の問題を取り入れていくか、映像を批判的に見る力をどう育てていくかということが大事です。

それから国際化の問題を取り上げていますが、帰国子女学級のある住吉の特色でもあるわけです。やや試行錯誤のところもあるが、破れ目も見える点で身近に感じて頂けるのではないかと思います。

六、七年して井上先生に整理していただき、単元学習の一般的な指導過程が見えてきました。まず次のようなつの過程というふうに整理しています。

1 課題づくりの段階

2 学習計画をたてる段階

3 探求活動の段階

...調べたり、フィールドに出かけていったり、秋の草花を観察したり、町の人たちにインタビューしてみたりという形での探求活動。

4 まとめる段階

...メモ等、国語の力の大きいに伸びる部分。

5 発表会活動の段階

...新聞作り、プレゼン、パネルディスカッション

6 評価

井上先生に整理していただいて助かりましたが、そうすると、二〇時間の単元の学習過程、時間の割り振りや学習活動のデザインをするよりどころが見えてきました。

指導過程の段階が見えてきた段階で、この六、七年くらいから、発表を公開するという形になってきました。そのころから附属の先生方に第六段階の表現活動の学習発表会の公開はやめるようお願いしました。

総合学習の発表会では、見栄えのいい研究発表会にするために何度も何度も練習するという話を聞いたことがあります。自分で考えるという学習の場にならず人に見せるためのものになっています。発表会をやるのであれば、練習の場を公開してほしい。放送劇であれば、音の入れ方、台詞の絞り方など、実際に子どもが伸びる場が先生の真剣勝負の場面です。そこを見せて欲しいとお願いしました。

次は一番最初の学習計画作りや課題づくりをするところを見せて欲しい、とお願いしました。どういうふうに課題をつくったらいいのか、どういうふうに学習計画を子どもに立てさせたらいいのかは、単元学習や総合学習の頃きになるから参考になります。

今日の授業では四年生の村崎(附属住吉小)教諭が「共通語と方言」で学習課題作りという、一番難しいところに取り組んでおられました。そういう野心は高く買うべきです。

教師があくせくするところは、普通見せたがらないのですが、読む前の段階、学習のデザインをつくる初期の段階を、是非公開して頂きたいと思っています。

三 総合学習と「生きる力を育てる」

(総合学習の三つの観点)

総合単元学習は総合学習とほぼ同じ過程を踏みますから、私は総合学習の研究会に呼ばれ、授業を見せてもらうことも多くなりました。そういうことを通しながら、総合学習の方向と問題点が見えてきました。

やはり、総合学習の三つの観点ということをお願いしますと、課題を発見し、問題解決を通して自己学習力をつけていくこと、そうすると、評価の観点も見えてきます。

(1)総合学習の六つの評価

- ①課題の発見は自分たちでできたか
- ②学習計画は自分たちでできたか
- ③調べる対象を自分たちで見つけ、実践できたか。
- ④アンケート、インタビュー、調査ができたか。
- ⑤調べたことを伝えられたか。発表できたか。
- ⑥協力しあえることができたか。
- ⑦自分で評価することができたか。

「～できたか」とすると、国語科の総合単元学習、教科を越えた総合学習で何を指導するかが見えてくる。

(2) 総合学習の課題

総合学習の課題は、人、もの、事、と出会うことです。人と出会うことによって生きる力を養う、ものと出会うことによって生きる力を養う、事と出会うことによって生きる力を養うことになるかと思えます。その点、うまくいったという報告を受けることが多いが、実際にはうまく行きません。宝塚の町の渋滞状況を調べた子どもたちが出した結論は道路の拡幅と植木の間隔を広げることです。単純ですね。これを、市の道路交通課に行ってお願しようということになった。課長さんは、「植木の間隔を縮めることはやれる。しかし、道路を広げる場合は立ち退きしてもらわねばならない。もし、あなた方がそこに住んでいたら、立ち退きできますか。」と逆に問い返したんです。子どもは答えに詰まって、物事が理想論だけではないと気づきました。

そういう問題があることを知らせる、そういう問題を割り切らないで立ち向かわせることが「生きる力」を養うこと、それが総合学習だと思います。今、総合学習を本気でやっていけば、ものや事とぶつかる。その点で、総合学習を進めていく

先生方はそれらをまともに受け止めていただきたいと思います。

ある学校の総合学習で、「公園にネコがたむろし、衛生上もよくない。保健所に連れていこう」という結論になったが、「保健所に連れて行くと殺される、かわいそう」という女の子の意見で、「保健所に連れて行くことが解決にならないこと」に気づく。このように割り切れない問題にぶつかることが「事」に出会う、ということになります。

福岡のある学校では、五年で環境問題として、近くの香椎川のゴミを清掃するのですが、自転車やバッグを取り除けても、三日もするとまた投げ込まれている。「なんと大人たちはダメなのか」と子どもが不満を言い始める。そのときにどう指導するのか。たじろがないで、「事」にぶつかることが総合学習における「生きる力を育てる」場なのです。子どもたちは立て札をたてるという結論を出しましたが、その解決の道を探らせるところに教科の学習と違うところがあると考えています。

これも博多で聞いたことですが、ある小学校で他のA校に飾ってあった「どんたく祭り」の飾りを借りに行ったところ、本来毎年毎に海に流す物であり、A校に貸しているのも例外的な扱いだと説明され、あきらめざるをえなかった。それでそのまま引き下がるのか、と先生が問いかけ、子どもたちに相談に行かせると、子どもたちは「自分たちがA校に見に行く」という結論を出す。これも一つの解決の仕方です。

割り切れない問題を近代の学校教育では取りあげてこなかった。それでは人間がひ弱になります。そこで、体験を通して生きる力を育てる、ということになったのだと思います。

この問題は子どもの自治能力を育てることと関わってくる。話し合いを通して、あるいはディスカッションを通して、問題を解決する、という話し合う力というのも自治能力を育てる要素だと思います。その点で、宝塚市の学校で取り上げた道路拡幅の問題は行き詰まったけれど、幸いに宝塚市は毎年八月に市長が子ども議会を招集しているので、子ども議会に道路拡幅問題を提出したらどうかと教師が提案して、暗い見通しが少し明るくなったそうです。現在、来年の八月に向けて準備

しています。

私はグローバルスクールというものに関わっていますが、来年の三月に子ども環境宣言というものを作れないか検討しています。このように、子どもたちの中に、自治能力、逃げないで葛藤する力を育てることが総合的な学習のこれからの課題ではないか。葛藤が見えてきているのに、割り切れるところだけで解決しようとしている面があります。解決できなくてもいいから抱え込む総合学習にしてはどうでしょうか。

(3)協同する力

総合学習では力を合わせて何かをする場面が多い。道路調べ、ネコの問題で保健所に訴えるやり方、子ども議会にどういふ文書を書くか、統計やアンケート等、それぞれ得手不得手を生かしながら協同する力を育てていきたい。それをするのが総合学習であり、教科で言えば、国語科総合単元学習ではないか、と考えています。

四 総合単元学習を充実させる

総合単元学習は国語科で言い始めたけれど、いわゆる「読む、書く、聞く、話す」の四つの活動を総合して行うことと、説明文や文学作品や報告文のようなジャンルを総合して行うのが総合単元学習です。昭和二五年前後の古い単元学習に対し、新単元学習とも言っています。住吉で言っている総合単元学習と同じことです。

総合学習でも国語科総合単元学習でも単元は作れるようになったかに見えます。これを充実していかない限り、すでに学力低下論がでているように、また「はい回る単元学習」「はい回る総合学習」としてつぶされていくと思います。これからはその内容をどう充実させていくかが課題です。総合学習、国語科総合単元学習を展開していくとき、それぞれの学習課程の中で、計画を立てる、まとめる、調べるという活動をどう指導するか、一歩踏み込んだ指導方法を開発しなければならない。

一つは個別指導すること。今日、勝見(附属住吉小)教諭、遠藤(附属住吉中)教諭がやっておられたような座席表カルテなどを作ることが、一人ひとりにきめ細かな指導をしていくための課題であろう、と思います。

学習計画を立てるときも、いろいろな学習計画の案を示してやる。あるいは、本調べをするなら、大橋(附属住吉中)教諭がやっておられたような調べるための材料を示してやる。こうなさい、ああしなさいではなく、こんな案があるよ、材料があるよ、と示してやる、ということが必要だろうと思います。

国語科単元学習の中で、「まとめる」という力を育てることについて言えば、池田尚登(福岡市香椎小)教諭の「問題意識が連続・発展する説明文の学習」(五年と六年の総合学習)では、個別カルテ、座席表カルテを作っています。

例えば、「1地球の温暖化って何」では、山下亜希子さんには、

- 前半に、温暖化の説明とは関係のない自然の仕組みのことが述べられている。

- 後半の説明も「温暖化」とは何かの説明になってない。

しかし、

- 「図は分かりやすい」。

原真奈美さんの場合は、

- このまま温暖化が続けば、どのくらい温度が上がると予想されているかが書かれている。

しかし、

- 温暖化とは何かが書かれていない。

と見えています。

「6 どうすれば温暖化を防げるか」について、原真奈美さんのところでは、

- 歩く、自転車、冷蔵庫は開けたらしめる、バスや電車を使う、ゴミを減らす方法はたくさん見つけている。

- なぜ、これらの方法を行えば温暖化を防げるのかが書けていない。

というふうに原因と解決策とを考えていく子どもにしたい、とこの先生は考えています。こういう形で、よい点と考えさせたいことを、一人ひとりについて見抜きメモすることが、これからのきめ細かな指導として、大事になっていくだろうと思います。

それから、ここでは、「温暖化って何」「温暖化になるとどうなるか」「何が地球を暖めるか」について先生がグルーピングしていますが、六年生くらいになると自分たちでグルーピングさせることも考えたい。ネーミングするということは小

見出し付けにあたるもので、優れた国語の学力です。

これをさらに温暖化を防ぐための説明をするプレゼンテーションをしようということで、原さん・田中さん・吉富さんのグループの原さんのところで、パソコンを使って他校とのホームページによる交流をしようということで、ホームページにするために、短いキャプションをつくる。三人の内容を一つにまとめる、という学習をさせています。原さんは「二五度温度が上がると、世界中が海に沈む」と書いています。これに対して田中さんは「これまで北の国にいなかった害虫やウイルスが北に増える。」ということを書いています。また吉富さんは「海中のサンゴが増える」と書いています。

この三人の観点を比較して、キャプションを書くとどうなるか。それぞれの文章の要旨をまとめて一つの文章にしていくという場をつくり、キーワードを見つけたり、違うところを見つけさせたりする援助が、これからの教師の仕事です。調べ方やまとめ方を教えず、「自由にしなさい」では総合学習は深まらない。私は手引きやメモの取り方などの指導について研究していきたい。

それから、單元ごとの振り返りが欠かせない。單元ごと、一時間ごとの振り返りの中から次の学習活動が見えてきます。興味や関心の実態をきめ細かくみていくことが、外側に開いて深まらないことを防ぐ。内側に帰る、内省していくことが必要でしょう。その点では、学習日記をつけさせるなどもよいと思います。

活動中心から内側に帰らないと薄っぺらになります。自分を振り返るということを組み込んでいきたい、と思っています。

おわりに

これからの十年はカリキュラム作りの時代だろうと考えています。これからは、学校ごとにカリキュラムを作っていく必要があるでしょう。

「カリキュラム」という言葉の再定義が今進んでいます。「教育課程」という言い方がされなくなっています。「教育課程」とは、指導要領を踏まえ、各県レベルの規定のもの、県と同じものが作られています。こういうものは、実際には使われない。

ラテン語の原語がクレレ(走った跡= course of study、履歴書)。空論ではなくて、昨年、二学期に苦労していたものがカリキュラムであり、空欄があつてよい。やってもいないものを書く必要はない。そのことによって今年二つ単元ができた。そういうものをつくっていったら、三年、四年経っていけば、結果的に学校に応じた単元ができあがるでしょう。

総合学習は小学校の先生が全教科を一人でやるので、やりやすい。中学校の先生がやろうとすると、子どもの方が、「もうそれは(小学校のときに)やった」という。そうすると、中学校の新しい総合学習は組みにくい。中学校の先生方にとって切実な問題になっています。

違うものをやらなくても、深めていくことはできるとは思います。姫路市の大社中学では、教師が提示した環境ボランティア、国際交流、などの課題を子どもたちが受け入れなかった。ここからがこの学校の先生たちの偉いところで、今度は「じゃあ何がやりたいのか」と子どもたち自身に提示させた。すると、「食」の問題を提示してきて、「食生活と健康」という方向に絞られていきました。

私は、体験と知識は対立概念として二極化しない方がよいだろうと思います。私は「学校ごとにカリキュラムづくりを始めよう」(『教育あまがさき』第四六号)に、

知識に傾き過ぎた教育への反省として、「体験」の意義が再認識されてきている。兵庫県の小学校における「自然学校」及び中学校における「トライやるウィーク」の試みは高く評価され、後者はすでに一九の都府県に導入されている。全国的には「生活科」と「総合的な学習」が取り入れられてきた。総合的な学習における「人・もの・こと」に出会う体験が、子どもの目を生き生きさせている。

としています。これまでの教育の歴史は、あるときは知識に傾き、また、ある時は系統的学習に、ある時は問題解決学習に傾いていきました。体験と知識の往復活動が学習であり、この問題は、どちらかを切り捨てればよい、というものではない。「総合学習は体験、教科の学習は知識だ」という

風に割り切ると、両方がだめになります。そういう点で、総合学習についても、学習計画を立てることができるのか、調べる内容についても子ども任せにしないで、知的水準の高いものを要求していくべきだと思います。

教科の学習が問題解決学習的に、問題を立てて、学習計画を立てて調べ学習に入るといいうように進んでいくべきだと思います。そのときに、国語科の単元学習が開いてきた道が生かされていきます。そのときに、自分たちで問題を見つける、自分たちで解決をする、国語の学習をつくるためにきめ細かく質を高めることが私達の課題になるでしょう。

そのことを見通しながらカリキュラムを作るときに体験と知識を二元的にとらえないで、バランスを考えながらやっていく。総合学習が「生きる力」と関係し、「人、事、もの」と出会うのに対して、国語学習は言葉と出会う。課題の置き所が違うのに、学習課程はかなり同じ過程を踏むことになるでしょう。

一つの参考資料として、私は横浜国立大学大学院の黒田明子氏の「アメリカンスクールの国語教育」(『横浜国大 国語教育研究』第十三号、二〇〇〇十一月)に引用されたアメリカの国語教科書「Literacy Place」を紹介しています。これは、六単元でできていて、単元一は「一人ひとりの声」、一年のところは「自分たちの好きなものを分かち合う」六年は「個人はそれぞれの経験で成り立っている」。第二単元は「問題解決」で、一年では「たくさんの種類の問題がある」、二年「問題を解決する方法は一つではない」。三年「計画を立てて問題を解決する」四年「人は新しいことを考えることによって問題を解決する」五年「根拠、論理、洞察力などによって、謎を解くことができる」六年では、私の言っているような意味で、「問題解決は生き抜くための力」としているのは興味深いと思います。

単元六は一年「私達は皆地域社会の一員である」六年「読み書きの力は民主主義において重要な役割を持つ」で終わるのは、私が「自治能力」と言っていたものがアメリカではこのようにまとめられるのだな、と思いました。

戦後、柳田国男が「よい国語教育はよい選挙民を育てるため」と言っていたことを思い出します。

それは「話す力」「聞き分ける力」を育てることが必要だからです。

単元四に「創造的表現」があります。これも国語科としては面白いと思います。「ユーモアは時としてコミュニケーションの最良の手段である」と第四学年のところにあります。

指導内容を整理すると、アメリカでは「聞くこと、話すこと」に並べ、「見ること」がすでに入っています。また情報処理も入っています。これなどはこれから国語科に入っていくでしょう。

国語科の学習内容を問題解決の場としている、アメリカの教科書の一事例を挙げましたが、子どもたちが自分で考え、自分で判断していけるような、学校ごとのしっかりしたカリキュラムを十年がかりくらいでしっかり作っていくことがこれから必要だと思います。そういうカリキュラムを作っていくための土台になる実践を附属の住吉小学校中学校はしてきたのではないかといくらかの自信を持って言えます。

こういうものを参考にしながら、各学校でそれぞれのカリキュラムを作っていくことを願って、私の話を終わりにしたいと思います。

編集部注 初出

2001年『国語教育の理論と実践 両輪』(両論の会)34号

(第十六回国語科総合単元学習・授業研究発表会講演於 神戸大学附属住吉小学校中学校 二〇〇〇年十一月十日 を元に作成された)